

理性とは何の謂いか

——ニーチェとハイデガーを繋ぐ導きの問い——

児玉 斗

「私は問い返す、ラチオ、ヌース、ノエイン、**Vernehmen** とは何の謂いか」。ハイデガーは講演「哲学の終りと思索の課題」の終り方にこのような問いを発する。唐突な奇妙な問いである。これだけ系列の言葉が問われながら、「理性」というその語が問われない。「理性」というその語を名指しして問題に付すという、「ニーチェの言葉：神は死んだ」の最後の一文が思い起こされる。即ち、「数世紀来賞讃された理性が思索の最も頑固な敵手であることを知ったとき、そのときようやく思索が始まる」。ここでもまた、最後になって唐突に「理性」が問題視される。それまで理性は論題ではなかったのである。

そう、「理性」とは何の謂いか、あるいは、何故「理性」が問われるのか、問いに値するのか。ハイデガーが「理性」を問うとき、その「理性」は、「**animal rationale**」という人間の本質の従来の規定を問う、問い直す、という文脈で考えられている。「ニーチェの言葉」でも、それを告げる「狂人」が「**animal rationale**」からずれていると言われていた。ハイデガーは、この従来の規定は間違っていないが、不十分だ、と言う。何故ならば、この規定は形而上学の内にあり、また近世形而上学において特に際立たせられた点だから、である。ハイデガーが随所で述べるには、デカルトが近世形而上学の開始であるのは、彼が真理を確実性として読み換え、その確実性を表象作用にみたことにある。自我が表象する、ここから自我が主体として際立った意味づけをもって捉えられ、主体性に立脚する近世形而上学が開始する、というのである。形而上学においては、存在者の存在が問われるだけで、存在そのものの真理は、問われない。こうハイデガーは形而上学を批判して、「ヒューマニズム書簡」で人間の本質を「脱存」と規定する。

ニーチェもまた、従来の人間からの脱却、あるいはその超克、を考察する。理性を俎上に載せることもまた頻りである。ニーチェが規定する人間は、「測定する者」であり、「超克されねばならない何ものか」である。そして『偶像の黄昏』において、人間の本来の姿を命名して「ディオニュソス」と呼ぶ。同じ箇所「ゲーテが欲したもの、それは全体性であった。彼は、理性や感性、感情、意志がばらばらなものと闘った」と記しているように、ニーチェにとって「理性」をそれだけ切り離して人間特有の能力とすることが誤謬なのである。このような誤謬は中期の諸著作において繰り返し問われている。初期からしてすでに「人間性が語られる場合、人間を自然から分離し、特徴づけるものがあるだろう、という表象が根柢にある。しかしそのような分離は実際には存在しない」（「ホメロスの競争べ」）と考えていた。だからこそ、身体「大いなる理性」が言われ、『この人を見よ』において自己の身体の理性を具体的に語ることとなる。理性はこれまで「理性」として誤って捉えられていたが、本来の理性を「再興」しよう、というのがニーチェを貫く思想の一つなのである。

ところで、ハイデガーは「表象する」ことをデカルトに基いて「思索する」こととする。

『思索とは何の謂いか』冒頭で「人間は理性的生き物である」が故に「思索し得る者」だとされる。しかし「我々は未だ思索してはいない」。それもそのはず、デカルトに基いた「思索する」ことは、「表象的計算的思索」（「哲学の終り」）なのである。計算する思索、への反対はニーチェの繰り返した点である。そもそもニーチェが「反理性」の（生の）哲学を説いたと誤解されるのは、初期に「理性」を低くしたからである。だがこの時「理性」ということで考えられていたのが「計算」する思索である（「ギリシア人の悲劇時代の哲学」）。このような「計算」に熟達せしめて、人を「通用する」ように、「すぐに使える」ようにするのが「教養」教育である。このような「教養」に対してニーチェは一貫して批判を繰り返しており、「人は思索することを学ばねばならない」（『偶像の黄昏』）と言うに至る。勿論ここで「学ばねばならない」と言われるのは「思索する」仕方である。「舞踏」として学ばねばならないという。ハイデガーが「思索の事柄」というのは、「存在の意味」あるいは「存在の真理」である。ニーチェは勿論「存在の真理」を舞踏する思索の事柄とは考えてはいない。だがニーチェは、「主体 **Subjekt**」を「言葉の誘惑」による誤謬と考え、この点でデカルトを批判する。そして「思想は、「それ」が欲するときに来るもので、「我」が欲するときに来るのではない」（『善悪』17）。思想は到来するものであり、それを受け止めるべきものなのである。ハイデガーの「存在の真理」もまた、到来するものである。到来するそれを受け止める働きは「ノエイン」である。「ノエイン」「ヌース」をハイデガーは「**Vernehmen**」「理性」とし、「**Denken**」が「**Vernehmen**」と言い換えられもする。あの「ニーチェの言葉」の最後の文は、その冒頭で引用されていた『悦ばしき知識』の「神の死」を告げて廻る「狂人」の声を、我々の思索の耳はまだ聞いていないのではないか、という問いかけを受けてのものであった。まことに、従来形而上学の「ラチオ」では、「**Vernehmen**」するというわけにはいかないのである。